

5. 試験施工の計画ならびに実施（シリーズB）

5.1 試験計画

(1) 試験施工概要

3.2 に示した付着方法に関する室内試験結果において良好な性状を示した方法により、実規模に近い条件で試験舗装を実施して、付着性状の長期観測を行う。具体的には、選定された数種の方法で既設コンクリート版表面を処理し、その上に薄層の普通コンクリートでオーバーレイを行い、付着性状を長期観測するとともに、力学試験用テストピットも作製して、力学試験も実施する。

(2) 試験施工期日と場所

・場 所：東京国際空港（羽田空港）の旧コンパスヤード内（旧東急ホテル前付近）。

・施工期日：

| | |
|-------------|----------|
| 2004年11月30日 | 下地処理 |
| 12月1日 | コンクリート打設 |
| 12月2日 | カッターメモリ |
| 12月7日 | 目地材注入 |

(3) 工区割り

図-5.1.1 に試験舗装の工区割りを示す。

(4) 界面処理方法

界面処理方法と施工規模は表-5.1.1 のとおりとした。室内試験結果では、接着剤を用いた付着方法が最も良好な性状を示したことから、④、⑤工区に接着剤を用いた工区を設け、①、②工区（SBのみ）および③工区（切削+SB）は比較対象のためのダミー工区とした。

表-5.1.1 界面処理方法と施工規模

| 工区 | 界面処理の仕様 | 規模 * |
|----|---|--|
| | ショットブラスト $400\text{kg}/\text{m}^2$ | 延長 $5\text{ m} \times$ 幅員 8 m $=40\text{m}^2$ |
| ① | (ただし、テストピット部は $600\text{kg}/\text{m}^2$) *** ・ $\phi 1.4\text{mm}$ 球を使用 | |
| ② | ショットブラスト $200\text{kg}/\text{m}^2$ ・ $\phi 1.4\text{mm}$ 球を使用 | $5\text{ m} \times 8\text{ m}$ $=40\text{m}^2$ |
| ③ | 切削機による切削+ショットブラスト $200\text{kg}/\text{m}^2$ ・ 切削深さ 10mm , $\phi 1.4\text{mm}$ 球を使用 | $5\text{ m} \times 8\text{ m}$ $=40\text{m}^2$ |
| ④ | 切削+ショットブラスト $150\text{kg}/\text{m}^2$ +接着剤 I ・ $1.3\text{ l}/\text{m}^2$ (エポキシ系, 塗布量は暫定量) 切削深さ 10mm , $\phi 1.4\text{mm}$ 球を使用 | $5\text{ m} \times 8\text{ m}$ $=40\text{m}^2$ |
| ⑤ | ショットブラスト $150\text{kg}/\text{m}^2$ +接着剤 I ・ $1.0\text{ l}/\text{m}^2$ (エポキシ系), $\phi 1.4\text{mm}$ 球を使用 | $5\text{ m} \times 8\text{ m}$ $=40\text{m}^2$ |

* 界面処理は延長 $5\text{ m} \times$ 幅員 8 m で実施し、コンクリート打設は延長 $5\text{ m} \times$ 幅員 7.5 m で一体施工とした。なお、幅員 7.5 m のうち、 5 m 部分を長期観察用、 2.5 m 部分を供試体採取用のテストピットとし、目地切削より区分した。

*** ①工区のテストピット部分（幅 $2.5\text{ m} \times$ 長さ 5 m ）において、投射密度を当初計画の $400\text{kg}/\text{m}^2$ で実施した結果、長期観察版ほどの凹凸度が得られなかったため、投射密度を $600\text{kg}/\text{m}^2$ に変更した。

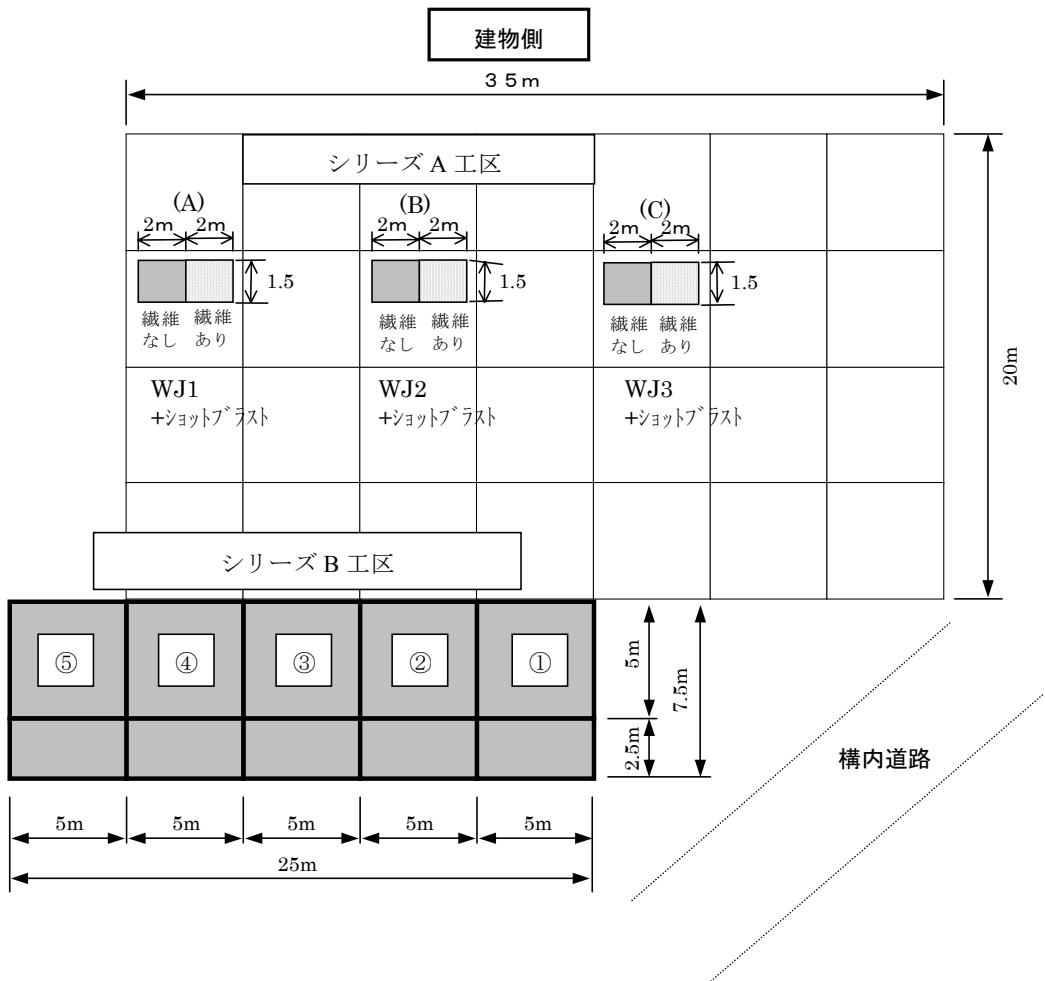


図-5.1.1 工区割り